



若者×ダンス

若者はなぜ踊るのか？

南青少年活動センター

市内7カ所にある青少年活動センターが特色を活かして、気になるニュースを紹介します。今回の担当は南青少年活動センターです！

南青少年活動センターでは、ここ3年間で青少年グループの利用のうち、ダンスを目的とした利用が60%近くを占めています。特にストリート系ダンスグループが増えている傾向があり、日々、夢に向かって励む姿や仲間同士で協力し競い合う姿が見受けられます。また、10代のころからダンスに夢中になり、「ダンスを教える側」に立つ20代の若者も多く利用しています。

このような背景のなか、「かれらはなぜダンスに熱中するのか」「なぜ踊るのか」といった素朴な疑問を投げかけることで、若者の「今」を知ることやダンスが開く可能性にふれることができるのではないのでしょうか。

今回の特集では、南センターを中心に活動しているダンサーの対談を掲載、そこで出てきたダンスのジャンルや用語をダンス教室代表のU-KO先生に解説いただきます。特集の最後では、立命館大学で踊りの研究を行っている遠藤保子教授のお話を紹介しています。若者の生の声を最後までお楽しみください。

◀ Aさん
ジャンル：ポップ



▶ Dさん
ジャンル：ヒップホップ・ソウル・ロック&ワック



今、あなたはなぜ踊るのですか？

◀ Bさん
ジャンル：ブレイク



▶ Eさん
ジャンル：ヒップホップ・ソウル・ロック&ワック



▼ Cさん
ジャンル：ブレイク



◀ Fさん
ジャンル：ジャズ・ヒップホップ・ソウル・ロック&ワック



対談 若者ダンサーの実は……

今回、対談に参加された5人のダンサー
(前ページの紹介写真参照)

- A：大学生「舞Style」所属(男性)
- B：大学生「舞Style」所属(男性)
- C：大学生「ハニーチュロッキー」所属(男性)
- D：ダンスインストラクター「UDM」所属(女性)
- E：ダンスインストラクター「UDM」所属(男性)
- F：高校生「UDM」所属(女性)

Q1 ダンスを始めたきっかけは？

A：高校生のころも関心はあったんですが、ダンス部には女子しかなくて。大学生になって友達に誘われて「やってみようかな」と思ってダンスを始めました。友達が参加していたグループへ体験にいった、そのまま今に至りますね。

B：僕は姉が小さいころからダンスしていて、よく発表会など見に行っているうちに、ダンスってカッコいいなって思うようになったんです。でも、高校のダンス部には女子しかいなかったため、大学に入ってから始めました。

C：僕は「スーパーチャンプル」というダンサーが大好きで出てくるテレビ番組を、姉ちゃんが見るのが日課で。姉ちゃんが大学から踊り始めたので、じゃあ僕もやろうって。大学入ったら踊るって決めていました。

D：東京に住んでるおばあちゃんに「何かが歓迎したい！」と、姉ふたりとダンスを考えておばあちゃんに見せました。だから、きっかけは、感謝の気持ちを伝えようと思ったことかな。

E：僕もみんなと一緒に姉が関係している……。小学校1年生のときに二つ上の姉がダンス



を習いたっていうんで一緒に通われました。まだ、フィットネススタジオにあるキッズクラスしかない時代、女の子ばかりで男の子がやるためずらしい、みたいな。あの頃、ほんまに嫌で、ずっと泣いていました。

F：私は中学生のころから興味はあったのですが、すごく運動音痴で。でも、何か一つ自分もできるものが欲しかった。思ってたとき、クラスで中心的存在の女の子がずっとダンスをしていて、「これだ！」と思い高校に入った12月から始めました。

Q2 今、なぜあなたは踊るのですか？

F：中学校のころに憧れた人のようになりたいというのもあったけど、今は、大学で芸術を学びたいと思っています。そのために演劇も始めたし、受験にダンスの実技があるから、今ががんばっています。自分にはダンスがあったから、そんな進路を考えるようになったのかも。

C：今を全力で楽しむため。イベントなどで楽しむのもそうだし、みんなでぐだりながら酒を飲んだり踊ったり、一人でストイックにやるのも好き。ダンス自体もだが、ダンスを取り巻く環境が好き。

E：なぜ踊っているのか……(必率的に)そうだったから。「先生になろう」と思っていたわけではなく、その時、がんばれることをやっていたらここにきました。今は、ダンスを仕事にしている、ダンスからいろんなことが派生しているから、それがなくなることがあり得ないです。

D：私は一人でダンスするのは楽しくないなあと思っています。チームで踊ることで、ダメなところを言い合い、お互いを認め合う仲間ができています。他にもイベントなどで知り合った人たちなどもつながって、そういうのがすごく大切だと思っています。そんなつながりを作っていきたいなあとという気持ちで今、踊っています。

B：楽しいから。僕も、一人でも仲間と一緒に、ふざけてでも真剣でも踊るのが楽しいから続けています。でも、うまく技ができないときとか、バトルで負けると悔しいから続けているのが一番の理由かな。「まだまだだな」「さあ練習をしなければ」と思います。

C：僕も続けたい。社会人になって忙しくなり、学生の頃とダンスへの取り組み方は変わるだろうけど、その分いろんな形で楽しめるのではないかと思っています。

D：私も踊り続けると思っています。今、一緒にがんばっている仲間がいるから。また、ダンスは誰もが一緒に楽しくできるし、身体を動かすこと、芸術性があることでも他のスポーツとは異なる魅力があります。ダンスを通じて私が教わってきたことを次に伝えていきたいです。

Q3 今後もダンスを続けますか？

A：踊りたいと思う限りは続けます。社会人になったら忙しくてなかなか踊る時間はないと思うけど、今までやってきて、ピタッと辞められるものではないと思います。

F：続けます。大学でダンスを学びたいし、やっぱり今お世話になっているUDM(6ページ参照)でも続けたいなと。いつか将来、夢を叶えたときに、恩返しできたら良いなと思っています。

B：続けます。これから先のことは分からないけど、「悔しい気持ち」はなくなる限らず思っているからそれがある限

教えて!

U-KO先生!

Q1 対談に登場したみなさんのダンスジャンルについて教えてください!!



●ポップ
ポップコーンの「弾ける」と、ヒットの「打つ」の二つの意味からきているダンスで、音のビートを自分の体で奏でるもの。パントマイムやロボットダンスの要素もある。



●ブレイク
ブレイクミュージックで踊る、身体を壊すかのような複雑な動きで魅せるスタイル。もともとは喧嘩から始まっており、殴り合いの代わりに技を見せ合いどっちがカッコいいかバトルをしていたとか。



●ジャズ
バレエの要素が多く入っているスタイルで、体の柔軟性とテクニックは必須。体を大きく見せるストロングジャズに、ポーズをとりながらスタイルを意識するスタイリングジャズ、ミュージカル寄りのシアタージャズなど数え切れないスタイルが!



●ヒップホップ
音にはまるように踊るスタイル。しかしジャンルの幅は広く、一言で説明するのが難しくこれだけで一日は語れそう……。

●ソウル
70年代に流行った魂に響くという意味のソウルミュージックを使ったダンス。使用する音楽の歴史が一番深く、ロック、ワックなどのベースにもなっている。

●ロック & ワック
ロックはソウルをベースにしたもので、直線的な動きが多い。対照的にワックは腕のしなり・伸びなどを使った腕技が多いダンス。

Q2

数々の場所

でダンスを

教えているU

先生ですが、

ズバリ! 最近のダ

ンスについて思うと

ころはありますか?

U-KO先生

学生の頃、ブラックミュージック(黒人の音楽)のもつ、“人に感動を与える”力強いメッセージに感銘を受けたことをきっかけにダンスを始めた。それから身体を壊し一時期ダンスから離れる時期もあったが「人との出会いをつなぐ場」の魅力を忘れられず再びダンスの世界に。そして2000年、ダンス教室「UDM」を開設。

UDM (ULTRA DANCE MARKET)

大阪、京都を拠点にスタジオをもたず、貸し施設で教室を開くという移動型スタイルのダンス教室。前身は京都市内にあったスタジオピーターパン。その当時のプロデューサー Tack 氏の考え「ダンスを通して人と人をつなぐ場所を作る」をコンセプトに活動中。



Q3

最後にU-KO先生のダンスへの情熱を一言で教えてください!!

現代のダンスは、Electric Dance Musicなどがよく見せるダンスが注目されています。自分たちが楽しむ目的のダンスも良いけれど、自分たちが踊っているダンスの意味を知ってもらうためにも、音楽の作り出された時代背景や世界観など音楽の歴史を知ってほしいです。

「ハート命」のダンスであってほしいです。気持ちがかもったダンスは人の心を動かします。ダンスが人と人をつなぐ手段としてあり続けられるよう、そのことを忘れずに伝え続けていきたいです。

UDM 今後のイベント

●平成28年11月3日(木)祝唐橋西寺育成苑まつり出演@京都市立八条中学校

●平成28年11月5日(土)大阪産業大学第51回大学祭出演@大阪産業大学

●平成29年2月26日(日)Big Bang Boom vol.4出演@京都府立文化芸術会館

我踊る故に我あり

立命館大学 産業社会学部現代社会学科教授 遠藤保子



私の研究は「アフリカの舞踊と社会に関する研究」です。サハラ砂漠以南の文字のなかった地域でのコミュニケーションを考えたときに、音楽や踊りが重要な役割を果たしているのではないかと、人々がどんな時に、何故踊るかに着目したのが研究のきっかけです。現地調査で感じたのは、踊りが彼らの生活の中ですべて重要な位置を占めているということでした。彼らの踊りには、神様に祈ったりご先祖様に感謝の意を表したりする場面や人生の重要な節目で見られる宗教的な側面と、みんなが集まって楽しむという世俗的な側面がありました。さらに、踊りにはコミュニケーションのいくつか層があり、まずは「自分との対話」、次に「踊っている者同士の対話」、「生演奏者と踊り手の対話」が生まれます。さらに「観客と踊り手の対話」、そして「祖先や神様と踊り手の対話」。このいくつかの層が感じられてコミュニケーションが生まれ、その世界を私は

「ワンダーランド」と捉えています。最近の若者のダンスにはご先祖様との対話といった要素は希薄ですが、元を辿ればそういった次元にたどり着くと思います。フランスの社会学者ロジェ・カイヨワが著者の一つ『遊びと人間』で提唱した「遊び」を4つに分類した概念があります。まず「模倣する楽しさ(ミミクリ)」。日常でも見られる様々な動作を真似して踊りにする楽しさです。次に「競争する楽しさ(アゴーン)」。それから「偶然性(アレア)」。即興性とも言い、その場の雰囲気や動きで楽しむことです。そして「めまい(イリクス)」。ぐるぐる回ったり、飛んだり、そういう動きをしたときにめまいがする、陶酔する楽しさがある。以上の要素があるから、今の若者たちは楽しんで踊っているのではないかと思います。

「ワンダーランド」ではなく、老若男女一緒に踊る、自然と一緒に踊る、ということ。二つ目が「下降思考」。トップを目指す「上昇志向」ではなく、頂上を目指さないものです。スキルアップやコンクールで優勝を目標とすることはあるが、それは派生的であって、みんなでやることに重きを置くという思考です。三つ目が「民族舞踊に新しい要素を加える(エスニシティへの回帰)」です。明治以降は欧米の文化を真似るのがよいという考えがありましたが、やはりもう一度日本の根底の文化を考へることも大切です。四つ目は「遊び心の復権」。近代は勤勉こそがよく、遊ぶのはよくないとされていましたが、今は遊び心を持つことも大切にされています。今までは、欧米など進んだ国の文化がよいと言われていましたが、上下をつけずに相対的に見るべきだと思っております。アフリカの生活は私たちの暮らしから見てもかなり過酷です。しかし、そんな暮らし

の中でも仕事が終わればみんなまで踊りだす、それが「ワンダーランド」ではないでしょうか。今の社会では、考え方や感じ方もそれぞれ違う中で、ダンスがなぜ踊られているのか、それが現代のダンスを考へるポイントになると思います。学校教育でダンスが必修化され、ダンスによって表現力が豊かになり、言いたいことがスムーズに伝えられることがあります。「我思うゆえに我あり」とデカルトがいいましたが、ダンスに関しては、「我踊る故に我あり」といえるのではないのでしょうか。 ※1 近代の進歩主義・合理主義的傾向を否定する考え方